

2020年5月17日礼拝説教

「真の神を知る」

使徒言行録17章16節～34節

使徒言行録を通してパウロの伝道旅行を追っていきますと、「伝道とは何か」という事について、実に多くの教訓を与えてくれます。つまり、伝道というのは、全く神様の成されることであり、神様の業に私達が参加し用いられていくという事です。人の思いや評価が割り込んできますと、伝道というよりも、自己満足と罪が神様にとって替わり、中心に座を占めることになってしまいます。パウロの伝道活動において、前進する時と、時を待つということ、或いは退くということを教えられるものがあります。

パウロは、マケドニアでの伝道に一応の成果を与えられましたが、ユダヤ人達の厳しい迫害にあつて、ギリシャのアテネへとやって来ました。この時、パウロは、彼の同労者である、テモテとシラスをベレアに残してきています。それは、あまりにも迫害の厳しさ故に、兄弟たちがまずパウロを送り出し、アテネまで送り出したからです。そして、先にアテネに着いたパウロは、なぜか伝道をすぐ開始しないで、テモテとシラスの到着を待っていたのです。私達が時を待つということにおいても、大切な神様の計画の中にあるということなのです。人間は、待つということが無駄なことに結びついてしまいます。けれども、神様の時を待つということが、人間の計画よりも優先するのです。パウロは、テモテとシラスを待つ日々の中で、アテネの町の人々の生活に接し、憤りを感じるほどに、その思い上がりと不信仰に出会ったのです。そこで、パウロは、この町に真の神を知らせなければならないという強い使命に燃えたのです。そして、パウロは、アテネの町で論じ始めました。なぜ彼は、テモテとシラスの到着を待ちきれずに論じ始めてしまったのでしょうか。なぜ彼は、憤るほどに燃えてきたのでしょうか。それは、世界に誇るアテネの文化を支えている多くの偶像でした。人間の驕りと文化の果てが、偶像という形をとって、アテネの町に氾濫していたからです。パウロは、居ても立ってもいられず、とにかく会堂や広場で、出会う人々誰にでも伝道し、論じ始めたのです。

あわてて気負って事を始めるとあまり良いことはありません。パウロは、アテネのプライドの高い哲学者達から、「このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか」と言われました。何か子どもでもあしらうかのように言われたのです。「おしゃべり」という言葉は、「道端の種をついばむ宿無しスズメ」という意味で、いかにも無意味な者としてあしらわれたということです。それは、パウロが、イエス様の復活について語ったからです。知識人の多いアテネにおいても、復活ということは、今までに聞いたことのない話であり、又、到底信じられないことを、大真面目に、情熱を傾けて語るパウロを見た時、いかにも滑稽で、無意味に見えたのであろうと思います。私も今年で50年間毎週礼拝で説教をしてきましたが、もしかして福音を語るということは、聞く人にとってこういうことではないかと、ふと思うことがあります。「このおしゃべりは、何を言おうとしているのか」というように……。

それでも、アテネの人々は好奇心が強く、「何か珍しいことを語る」というので、パウロは、哲学者や裁判官、貴婦人達の前で説教をすることになったのです。

そのパウロの説教の内容がここに記されています。この内容は、パウロが、いかにもアテネの

知識人を前にしての説教という感じがします。けれども、アテネの人々は単に好奇心から、「珍しい話」としてしか聞いていません。やがて世界の人々が、この福音によって生活が変わり、社会が変わり、国が変わっていくような力を内に宿していたパウロの言葉を、単に「珍しい話」として耳と傾けていたというのです。そこには、聞く者に何の変化ももたらさない、神様の言葉の前に無感動な姿しかないのです。イエス様が言われた、「聞く耳のある者は聞くが良い」という言葉は、こういう聞く耳を持つことの無い人々への警告であったと思います。それでもパウロは語りました。「時が良くて悪くても語りなさい」とありますから、パウロは語り続けました。

さて、そのパウロの説教です。パウロは、アテネにあるおびただしい偶像を見て内心は、憤りの燃えていたのですが、そこは伝道者です。大変穏やかに、「アテネの人達よ」と、語り出します。そして、「あなた方が求めている真の神を、私が今知らせてあげよう」と言うのです。真の神様というのは、人間の欲望と文化の行き着く、手で造られた偶像ではない。人間の罪の営みの結果作られるような神ではないのです。神様は自ら神であり、むしろ、神様が天地を造られ、人間をも造られました。その造られた人間が神様の下から迷い出てしまい、全くの本末転倒してしまったのです。それが偶像の氾濫なのです。

丁度、迷い出てしまった子どもが行き当たりばつたりの大人を見て、その人を父親と考えるようなものです。カモの子は、卵から孵って最初に出会った動物が、それが何であれ自分の親と思い込んでしまうと言われていますが、普通はそんなことにはなりません。子どもは自分の親を考え出すものではなく、自分で適当に決めるものでもありません。ましてや、自分で造り出すものではありません。動かすことの出来ない自分の親という存在があります。それを「探し求める」べきなのです。イエス様は「探しなさい。そうすれば、見つかる。」と言われてました。親を探し求めることを忘れてしまった。或いは諦めてしまった子どもの将来はどういうことになるのでしょうか。

パウロは、自分の手で造った偶像を神としているアテネの人々に憤りすら感じながら、語っています。人が熱心に追い求めて探すならば、神様は出会ってくださいます。けれど、人々は求めることをしませんでした。パウロは、これを無知から来るものだと言っています。迷い出た生活習慣から来る無知です。日本の社会でも、その時々に応じて様々な神を拝むことに何の抵抗も感じなくなっています。七五三には神社に行き、結婚式は教会で、葬儀は仏教というパターンが当たり前のように行なわれています。又、一軒の家に部屋ごとに神棚、仏壇とがあり、正月は神棚、お盆には仏壇、クリスマスにはツリーとかサンタクロースとなります。

30節に、「神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいました。」とあります。しかし、イエス・キリストによって神様の御心が示されました。神様の寛容と忍耐の時は過ぎたのです。そして、今や、神の義がキリストによって現されました。もし、人々が依然としてそれを無視続けるならば、神の義をもって、裁きの日を定めておられます。キリストによって示された恵みによる救いを無視する者は救いから漏れると、聖書は記しています。キリストの十字架と復活の出来事は、神様が価無しに差し出して下さった救いの恵みなのです。けれど、アテネの人々は、これを聞いてあざ笑いました。また、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言いました。人が、「いずれまた」という時は、もうすでに真理から顔をそむけている時です。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」

(コリントの信徒への手紙Ⅰ 1:18)

そして、パウロは、「その場を立ち去った」。この時、パウロはもはや敗北感も憤りすらありませんでした。後は、神様にお任せする以外ないと思ったのです。神様の御心に生きるパウロは、静かにそこを去って行きました。燃えることも、憤ることも、必要なことです。また、論争をしなければならないこともあります。けれども、主にあつて、静かに退かなければならないこともあります。アテネの人々は、ある者はあざ笑い、ある者は「いずれまた」と言って、問題にしませんでした。「しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた」とあるように、神様の前に、この何人かが信じたということが、何よりも尊いのです。この「何人か」は、パウロが予定した何人かではなく、神様が予定されていた何人かでした。私達は、この神様の予定のために用いられていくのです。

釧路教会牧師

青砥 好夫